古墳文化が花開くまで②

『煮て食べる』ことに初めて出会った時、人びとは一体どのような感動を覚えただろうか。『煮る』という調理法は『土器』の発明によって可能となったものである。土器が誕生し普及した背景をみてみると、まず約13000年前頃から進んだ温暖化によって、自然環境に大きな変化があった。針葉樹にかわって落葉広葉樹や照葉樹が発達し始めた森は、秋になると多くの木の実を実らせた。また大陸と陸続きだった氷河時代に南からきたナウマンゾウ・ヘラジカや北からきたマンモスは環境の変化に伴って絶滅し、それに代わってイノシシ・シカ・ウサギといった中型・小型動物が多くみられるようになった。この自然環境の変化によって豊かな森の恵みを受けられるようになった人びとは、俊敏に動く新たな獲物を獲得するために弓矢を

発明するとともに、ドングリ・クリ・トチ・クルミなど植物性食物への依存を高め、それを加工・調理するための道具を作り出していった。そのような中、発明された土器はそれまでの数十万年にわたって『生で食べる』『焼く』『蒸し焼きする』など限られた調理法であった食生活に大きな変化をもたらした。土器の使用により、固い食物を柔らかくしたり、木の実類のアク抜きをしたり、長く保存したりができるようになったことで、植物性食物を中心に獣肉・魚介類なども多種多様に食べられるようになったと考えられる。食糧の対象が飛躍的に広がり食生活に豊かさをもたらしたといえる。そのように安定した食物獲得を背景に『移動する生活』から『定住する生活』へと転換されていき、住居が構えられ、集落も形成されるようになっていく。人びとが環境変化に適応し、新たな文化を築き始めた時代 - 今日でいう『縄文時代』の始まりである。

日本列島南端の南九州では、列島各地に先駆けた温暖化を背景に、他の地域よりも早熟ともいえる『縄文文化』が育まれた。そのことを裏付ける代表的な遺跡が霧島市国分の

『上野原遺跡』である。約9500年前（縄文時代早期前葉）の大集落跡では、39基の集石（蒸し焼き炉）・16基の連穴土坑（燻製炉）などの調理施設を伴った52軒の竪穴住居が発見された。出土した土器も当時は尖底土器が一般的であったといわれる中、円筒形・角筒形で平底の貝殻文土器であるなど、独自の土器文化の発達を示している。また約7500年前（縄文時代早期後葉）の『まつり・儀式の場』と考えられる遺構や壺形土器（一般的に食糧保存を目的とする壺形土器の使用は縄文時代後期である）・土偶・用途不明の異形石器・土製石製の耳飾り（耳栓）など祭器や装飾的な道具が多数出土している。以上のことから、縄文時代早期に南九州では安定した生活のもと、高度な精神文化を伴った先進的な縄文文化が形成されていたことを窺い知ることができる。町内でも『二子塚A遺跡』『下堀遺跡』において縄文時代早期の土器や集石遺構が確認されている。

縄文文化をリードしてきた南九州の文化が突如終焉を迎える事態が起きた。約7300年前、薩摩半島から約50㎞南の大隅海峡にある鬼界カルデラが大噴火し、南九州の恵まれた自然とそれによって育まれた文化が壊滅したのである。鬼界カルデラの大噴火による火砕流は海上を越えて南九州を襲った。またその火山灰（アカホヤ火山灰）は奄美地方・東北地方・朝鮮半島南部でも確認されていて、その噴火の大きさを想像できる。東九州自動車道の建設に伴い町内で発掘調査された『永吉天神段遺跡』『荒園遺跡』からは鬼界カルデラ噴火時の地震による液状化現象（噴砂跡）が発見されている。

植物も動物も壊滅した南九州の地は、再び人びとが住める環境になるまでに数百年～千年を要したといわれる。再生した地で人びとの新たな生活が始まり文化が育まれていくのである。（続く）